

奨学生選考総評

詩を選ぶことの難しさは毎月の選考でつねづね感じていますが、応募者の皆さんそれぞれに心に留まる作品があり、奨学生選考の一端を担い、これからも書き続けていこうという強い意志を持つ方々の中から候補者を選ぶというのは苦しさを伴う時間でした。

もちろん苦しいだけではなく、これまで月次選考時に読んだことのある作品を一人につき10篇まとめて読むことで、以前読んだときとは違う響き方のする作品もでてきて刺激を受けましたし、詩と出会いなおす喜びがありました。また、それぞれの作者の持つ特性を改めて感じることができました。

惜しくも今回奨学生に選ばれなかった方もぜひ書き続けてほしいと思います。以前の月次選考評でも書きましたが、自分の言葉を見つけ世界を読みかえてゆくことは、生を生かすことにつながります。いまだ先の見えづらい日々、詩と向き合う時間は今まで以上に大切な時間になるはず。これからも心や身体、世界のありようを詩の言葉でとらえる試みを続けてまいりましょう。

以下、特に印象に残った作品や作風に感じたことなどを記します。

◆さいう（愛知県）

「眠るきみからは／若葉の匂いして／銀河は発火しているようだ」「人はみな／ここに花の芯を持つ／爪先つんと上向きながら」「咽頭を十指で軽く抑え付け／あなた煮詰めた花梨のようだ」「心音と言う名の淡いかがやきを／抱いて貴女が目を覚ます朝」など、鮮やかな比喻によって、胸騒ぎを内に秘めた甘美さや身体の生命力が伝わってきます。

◆青木雅（埼玉県）

「火になって皆さんに優しくしたい」「人が好き 強い力でみかんを握る」「しにたいつくえのかどがするどい」「郵便太郎が遠くに行って死んだ」「まだ大丈夫な人の自画像かな」「中野区で網の目をすり抜けている」など、絶妙な語彙の選択によって、おかしみややわらかな痛みが立ち上がっています。

◆暮田真名（東京都）

「暗室で／鷺鳥にされたことがある」「着払いで枕詞を送られる」「そよ風の／ために書式がそろわない」「弦楽器と／見分けがつかない／小学生」など、飛躍のある組み合わせ、その突き抜け方に作者の特性を感じます。次に何がくるのかわからない予測不能の面白さ。

◆藤色（京都府）

月次選考評にも書きましたが、「さんずいと林の間でねむる／足はちょっとはみ出して」で

は、<淋しい>という感情が、<淋>の字そのものと身体との組み合わせによって巧みに描かれています。他の作品「とおくに行きたいと思った／やたら柔らかいバナナをむくとき」「電源を切っても／赤いランプのついたテレビ／そんな感じの朝早く」「左手に染みた匂いは遠くからする／あの河原歩いた日」などからも、日常を送るなかで浮上する心の揺れが、身体感覚を通して伝わってきます。

◆花澤希海（千葉県）

「あなたから順に忘れる砕氷船」「月氷る未明の遙か心電図」「目覚めない時計を飼っている囊」「数珠を置く窓辺から見る猫柳」「花器割れて信仰の白狂う蝶」など、対象との距離感が印象的。静謐でありながら張り詰めていて、どの作品にも死の気配が漂っています。

◆白野（新潟県）

「くちびるのたてじわを／ぬうようにして／きみのぜんぶをつつんでさらう」「その色した折り鶴のはね折り曲／げてとべない鳥をとべなくしたい」「文集が黄ばんでゆくたび過去に／見た鳥のなきごえがきれいになる」「A4のノートにはさまる虫の死を／うすく知らせるひかりのにおい」など、みずみずしく、言葉の組み合わせも美しい。漢字とひらがなの使いわけにも意識的で、その効果もしっかり現れていると思います。

◆サトリ（東京都）

「踏み抜く踵が霜柱をねだる／夜空」「雑踏の／中には音は／一つもない／自分の匂い／だけするマスク」「秒針の音の隙間に夜を聞く」「肩こりの／薬の匂い／よく知らない／祖父に背中を／預けて眠る」など、とりわけ孤独の描き方が優れていると思いました。また、「また今日も／死を避けるため／生を切り／売りして稼ぐ／時給千円」、「切り」で改行をするなど、形式に対しても高い意識が向けられています。

◆燦嗣いとり（愛知県）

「手品師の帽子を出る直前、／鳩は死について考える」。不在から存在へ、境目を越えると同時に「死」はやってくる。他にも「楢円をたくさん書いていると／たまに卵の幽霊が紛れ込む」「隣人は人魚だろうか／午前二時壁の向こうで波音がする」「何度目の寝返りから夢だったのか」など、なんらかの境界が描かれているものに惹かれました。

◆細村星一郎（東京都）

「遠雷と言葉が流れ込んでくる」「梅雨の星／キリンの濡れた目のなかに」「ビーカーに星の明りをためておく」「こちら操縦席まもなく春の月」など、「限界を決めたら蟹に怒られた」という作者の言葉通り、現実世界の枠を取り払い、永遠へと接近してゆくかのようなダイナミックさに魅力を感じます。

◆長谷川柊香（宮城県）

「食パンのくぼみ戻らぬ春の宵」「行く春に食器重なる音一つ」「流れ星この村に皆生まれ死ぬ」「重力に永久に溺れて蝶も人も」「腐らない桃があったら捨てなさい」。詩の中のひとつひとつのモチーフの存在感が際立っています。桃は腐るから桃であって、「腐らない桃」は桃ではない。今のこの春は二度と巡って来ない春。今ここに<私>が存在しているということのかけがえのなさ。

◆合川秋穂（京都府）

「ピーマンの空洞だけが頼りです」「海に降る雨／暗闇で手をとるはずだった」「バスタブが狭い／なんにも悲しくない」「椿落ちてなお重さを信じない」など、言外に含むものが大きく、繊細で複雑な心情が描かれていて心に残りました。

浦歌無子